昭和44年3月

秋田県文化財調査報告書第17集

足田（たらだ）遺跡発掘調査略報

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会

序

羽後町足田遺跡は、すでに昭和36、37、38、41年と4次にわたり発掘調査がおこなわれております。これらの結果については「秋田県文化財調査報告書第3集、羽後町足田遺跡発掘調査概報」「秋田県文化財調査報告書第10集、足田遺跡発掘調査概報」としてまとめ、発刊いたしました。

本遺跡は雄勝城の擬定地として早くから注目されていた遺跡でありますが、その範囲が広く、また地形が複雑であるため全貌を明らかにすることはまことに困難なところであります。

今年度の調査は第5次調査であります。調査の結査櫓跡が発見され、遺跡の性格を裏づける資料が少しずつではあるが増加しているのであります。

その結果を概報としてまとめ、このたび刊行することになりました。ついては研究者はもちろんのこと、広く遺跡の保存に関心をもっておられる各位のご活用をお願いする次第であります。

最後に調査を直接担当された調査員、ご協力された羽後町関係者の労苦に対し深甚の謝意を表するものであります。

昭和44年3月

秋田県教育委員会

教育長　伊　藤　忠　二

目　　次

第１章　発掘にいたるまでの経過 …… 1
第２章　調 査 の 結 果 …… 3
　1．雲 雀 野 C 地 区 …… 3
　2．雲 雀 野 D 地 区 …… 4
　3．羽後高校実習農場畑地地区 …… 4
　4．雲雀野C地区の西方開田地区 …… 4
　5．岩 城 第 4 区 …… 5
お わ り に …… 5

挿 図 目 次

第１図　足田遺跡と雄勝城跡擬定地諸説との関係図 …… 6
第２図　調査地域の位置図 …… 7
第３図　雲雀野C地区実測図 …… 9
第４図　雲雀野C地区櫓跡土壙写真 …… 15
第５図　雲雀野D地区北崖断面に見えていた土壙写真 …… 15
第６図　雲雀野D地区平面実測図 …… 11
第７図　雲雀野D地区発掘写真 …… 16
第８図　羽後高校実習農場畑地地区平面実測図 …… 13
第９図　羽後高校実習農場畑地地区柱穴写真 …… 16

第1章　発掘にいたるまでの経過

この遺跡については、昭和36年11月の9日から15日までの7日間（第1次）、翌37年5月1日から7日までの7日間（第2次）、そのまた翌38年の7月23日から8月10日までの19日間（第3次）、さらに41年10月10日から11月3日までの25日間（第4次）と4次にわたって発掘調査がおこなわれてきた。

その結果、出土遺物としては土師器・須恵器（墨書あるものを含む）・木器・植物種子・鉄製鎌残片・植物繊維編組品などのほかに住居跡や長大な柵列の土壙・窯跡等が発見されたのであった。[註1]

さて、この遺跡の性格に関連して、ここに雄勝城が問題になってきたのである。雄勝城の築城年代とか、その機能などについては、長文にわたるので暫く措くとしても、その所在擬定地としては、この遺跡のある地域は古くから注目されておったのである。それで、昭和36年に柵列土壙が発見されたのを契機として、新しく世上の関心をよぶようになり、発掘調査実施ということになったのである。そのような経過については県の文化財調査報告書第10集「足田遺跡発掘調査概報」において、やや詳しくのべておいたのであった。そうではあるが、要点だけはここに摘記しておくのが至当かと思われる。

そもそも雄勝城は古代東北辺境における征夷開拓期に、出羽国に築造された重要なる城柵であったことは史上に著聞しているのであるが、その築城年代に関しては天平宝字2年（758）説、天平宝字3年説、天平宝字年間説、宝字2年小勝柵・同年雄勝城完成説、仮城創立天平年間説など5説もあり、その帰一するところを知らないほどなのである。[註2] ということは雄勝城は歴史上において問題をはらんでいる課題でもあるということである。したがって、その所在擬定地についても10説ほどもあって、[註3] 諸説紛々である。このことについては既に第4次昭和41年度発掘概報にのべておいたから擬定地に関する諸説の詳細をのべることは差しひかえることにするが、結論だけを列記すれば下のごとくである。

1　雄勝郡湯沢市湯沢城説
2　雄勝郡明治村大字大沢⇒天下屋布（やしき）説
3　雄勝郡新城村高尾田（タカオダ）説
4　雄勝郡元西馬音内村堀回字元木・山田村小字堂ヶ沢・新成村高尾田字高寺説
5　雄勝郡新成村足田字土館・高尾田及び西馬音内町床舞説
6　雄勝郡東成瀬村田子内説
7　雄勝郡新成村郡山説
8　雄勝郡小野盆地説
9　雄勝郡山田村説
10　仙北郡払田柵説

これら10説のうち仙北郡払田説以外は９説ともすべて雄勝郡内に雄勝城を擬定している。９説のうちでも東成瀬村田子内説は水戸の「大日本史」にみえるもので「しかれども山間に辟在し、所謂十道之衝という（雄勝城の立地条件）と符（合）せず……しばらく此に係け、もって後考に待つ」とあるように、ごく控えめな提唱であって、単なる臆説にすぎないから、９説のうちから田子内説を除外するのが穏当であろう。湯沢城説・小野盆地説・山田村説・郡山説、これら４説も積極的証徴をあげているのではなくて地名とか交通順路などから推測したという程度のものである。

詳細にのべているのは上法茂雄氏の明治村大字⇒天下屋布説[註4]、吉田東伍博士の新成村高尾田説[註5]、原秀四郎博士の新成村高尾田字高寺説[註6]、深沢多市氏の新成村足田字土館・高尾田説[註7]、これら４説である。そこで注目しなければならないことは、これら４説の擬定地は半径３キロメートルの圏内に集中しているということである。そして半径３キロの円圏のほぼ中心にあたっているのが今回調査した足田字雲雀野遺跡なのである。このことも既に昭和41年度発掘の概報に詳述しておいたとおりである。（第１図）

であるから、足田字雲雀野遺跡を中心とする半径３キロの地域は、すでに雄勝城跡として、いくたの先学が着目していたのである。ただ、遺跡が発見されていなかったにすぎないまでのことであった。ところが、本章冒頭にのべておいたように４次にわたる調査によって長大な柵列の１部とその他の遺物等が発見されるにいたったので、左記要項により第５次発掘が国庫補助を得て実施されることになったのである。

記

1　調査の主体

秋田県教育委員会

秋田県雄勝郡羽後町教育委員会

2　調査期間

昭和43年９月21日より10月11日までの21日間

3　調査の場所

秋田県雄勝郡羽後町足田字雲雀野12の５、14の８、その他。

4　調査員

岩手大学教授	板橋　源
秋田県文化財専門委員	奈良修介
岩手大学文部技官	佐々木博康
補助員	
岩手大学学生	鈴木隆英
同	千葉　清
同	阿部牧雄

同		小山哲雄
同		高橋隆蔵
同		熊谷富代子
事務担当		
秋田県教育庁社会教育主事		吉川欣一
同	文化財係主任	児玉正路
同	学芸員	富樫泰時
羽後町教委	教育課長	藤原景三
同	社会教育係長	藤原隆太郎
羽後町元西		柿崎隆興

特にも柿崎隆興氏には多大の援助と教示とをいただいたし、なお地元の和泉忠一郎・渡辺順蔵の両氏、県立羽後高等学校の国安裕・佐藤善吉・須藤泰全の3教諭はじめ同校生徒多数の方々、および一関工業高校教諭国生尚・立正大学学生高橋純子の諸氏からも懇篤なる援助をいただいた。ここに銘記して謝意を表する次第である。

第2章 調査の結果

調査期間中は天候にめぐまれたが調査は難行した。難行した理由は後述することとし、今回調査した地区ごとにその結果を摘記すると次のごとくである。

1. 雲雀野C地区（第2・3・4図）

前回までに発見されている南北方向から西方に向ってのびる長大な柵列土壙（41年度調査では雲雀野A地区・同B地区と称したところ）をさらに西方に追求するため最西南端の52号土壙を再発掘した。そして、この地区を雲雀野C地区とよぶことにした。41年度調査した地区を雲雀野A地区・同B地区と称していた名称に追従してである。

さて、前回調査したときには52号地点は草生地であったが、このたびは畑地に変り、地山も前回のときより30cmほど低くなっていたので、52号土壙は削平され消滅していた。こういった状態ではあるが、痕跡でも残存しておればと思い柵列の西方延長方向にトレンチを設定した結果は第3・第4図のごとくである。

52号土壙地点より20mほど西方で橙褐色の粘土ブロックを伴う黒色土の掘込穴が発見された。こうい

った掘込穴が70mほど西方までの間に散在し、70m地点において3mほどの間隔でL字形に並ぶ小柱穴が3カ所発見された。

また、50号土壙の南5m弱のところに前回の調査で土壙を発見していたので、この性格の究明につとめたところ、51号土壙の南5m弱のところにも新しく土壙1カ所が発見された。それで、その南方をも念のため発掘した。結局のところ、柵列に沿って1辺5m弱の平面をもち柵列の外側に張出し、しかも台地の頂部に所在している構築物は櫓であるに相違ない。

2. 雲雀野D地区（第2・5・6・7図）

雲雀野台地のほぼ中央部にあたり、なだらかな東高西低の地形である。東方はリンゴ園で、西方は湿地帯（現在は水田となっている）を間にはさんで41年度に窯跡が発掘された七窪台地となっている。

この台地の北部が今年の春ブルドーザーで削平され水田となった。そのため残存した台地（草生地）と今春開田された水田との境界は崖となっている。この崖の斜面に径50cm～1m、深さ50cmほどの黒色土が地山にくいこんでいるのが発見された（第5図）。それを手がかりに発掘した結果が第3図である。ここでは粘土を伴なう大形の掘り込み穴とみられる黒色土の部分と、平面的には不鮮明な柱穴が発見された。ここの遺構は仮設程度の建物が複合しているのであろう。柱筋のとおっているものが見当らなかったし、土師とか須恵は破片すら出土しなかったからである。したがって、遺構の時期も未詳というほかない。

3. 羽後高校実習農場畑地地区（第2・8・9図）

新成中学校のグランドの西方にあたる羽後高校実習農場畑地のほぼ中央部に十文字にトレンチを設定した。第8図のように柱穴が南北方向に一直線にならんで10カ所発見された。北端から南端までの総延長は僅か9.80mにすぎない。柱穴の平面は1辺20cm内外を1辺とする方形である。そして東にも西にも、この南北方向の一直線をなす柱列とみあうような柱穴は発見されなかったので、この遺構の性格はもとよりのこと、その構築された時代も全く不明といわざるをえない。出土遺物も全くなかった。

4. 雲雀野C地区の西方開田地区（第2図）

雲雀野B地区とか同C区とか言っても、ともに雲雀野台地のうちでは最も高い頂部のことである。第4次の調査で柵列を探索した西方末端地域をB地区と命名しておいてあったので、今回はB地区柵列の外側（南）を新しく探索して櫓跡をみいだし、その場所をC地区と称したまでのことであるからである。

さて、B地区、C地区と称した台地頂部から西方に向って緩く傾斜しているが、約150mほどさがったところにリンゴ園がある。このリンゴ園が今回の調査期間中に水田に転換された。即ち10月3日からブルトーザーを入れ6日で開田工事は終了した。地主石塚寅雄氏（足田字六沢（たさわ）37番）の好意により、工事と並

行して調査することができた。この場所は長大な柵列の延長方向にあたっているのではないかと危惧されたからである。4日の日に土壙らしい痕跡が東西方向に一線にならんで5m弱の間隔で3カ所発見された。3カ所のうち東側と西側のものは、直ちに削平され消滅してしまったが、中央にあった1カ所は幸にも残存していたので翌5日朝まで保存していただき、5日朝に計測した。計測終了と同時に、これも削平され消滅してしまった。これら3カ所の土壙の方位は今までに発見されてきた長大な柵列の西方延長方向と合致しているが、前回まで発見された柵列土壙の平均間隔6m～6m50、平面平均径80～94cmであるのにくらべてみると、間隔は5m弱、中央の残存していた土壙の径は60cmであった。

そこで、B・C地区とこの開田地区との中間にあたっている低地の水田を発掘し、はたして連続しているのかどうか、その証拠を検討してみたのであるが、中間低地の水田も今年の春にブルトーザーで開田したものであったので、発掘は徒労に帰した。したがって、今となっては、柵列がここまで延びているとは明言できないのである。

5. 岩城第4区

昭和38年度に岩城において第1区・第2区・第3区と命名して3カ所発掘してあるので、このたび調査した地区を第4区とよぶことにしたが、徒労に終った。縄文の破片と石片が出土しただけである。

おわりに――

今回の発掘で特に記すほどの遺物は出土しなかった。雲雀野C・D地区と岩城第4区で風蝕のはげしい磨滅した縄文土器片10数片と石材数片だけであった。

調査期間中は天候にめぐまれ且つ地元の方々には多大の御好意をいただきながら、めぼしい成果としては檜跡1カ所だけである。足田遺跡のある丘陵性台地は多少の起伏をもっているが、水源（湧水）にめぐまれているために、耕作営為上かなり古くから高地を削平して平坦にするとか、窪地に貯水用の池塘を設けるなどして原地形が変貌しているのではないか。そうであるとするならば、今後の調査の前途も多難が予想されるのである。

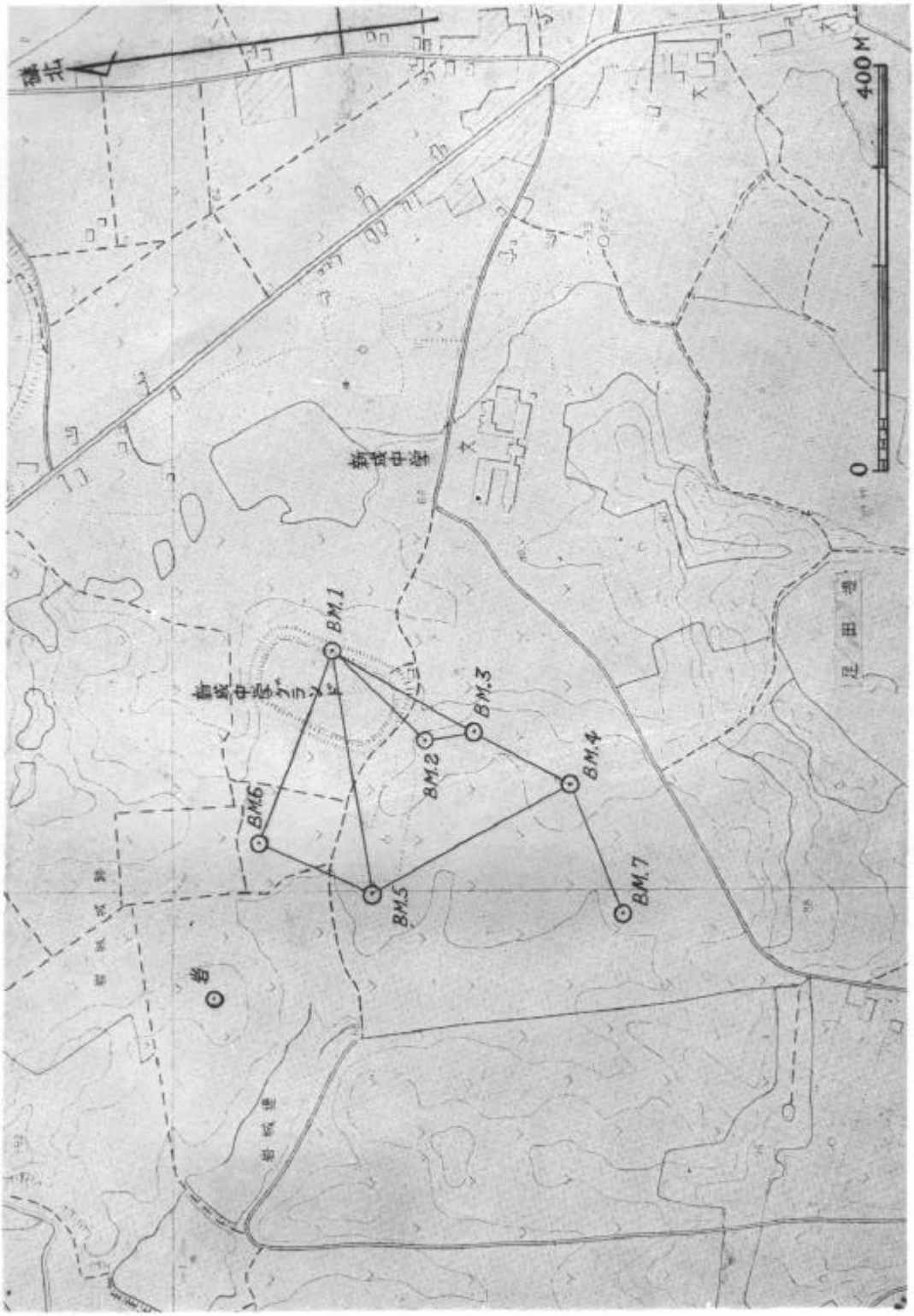
註

1 羽後町足田遺跡発掘調査概報、秋田県文化財調査報告書第3集、昭和39年4月20日。
　足田遺跡発掘調査概報、秋田県文化財調査報告書第10集、昭和42年3月
2 板橋源、出羽国雄勝城考、出羽路17号、昭和37年11月。
3 同上
4 上法茂雄、「雄勝城考」、歴史地理、3ノ10、明治34年
5 吉田東伍博士「大日本地名辞書」4553頁。
6 原秀四郎博士の学位論文「学位記」、官報第6719号、明治38年11月1日所載。
7 深沢多市、「雄勝城址考」、歴史地理41ノ6、大正12年。

第1図　足田遺跡と雄勝城跡擬定地諸説との関係図

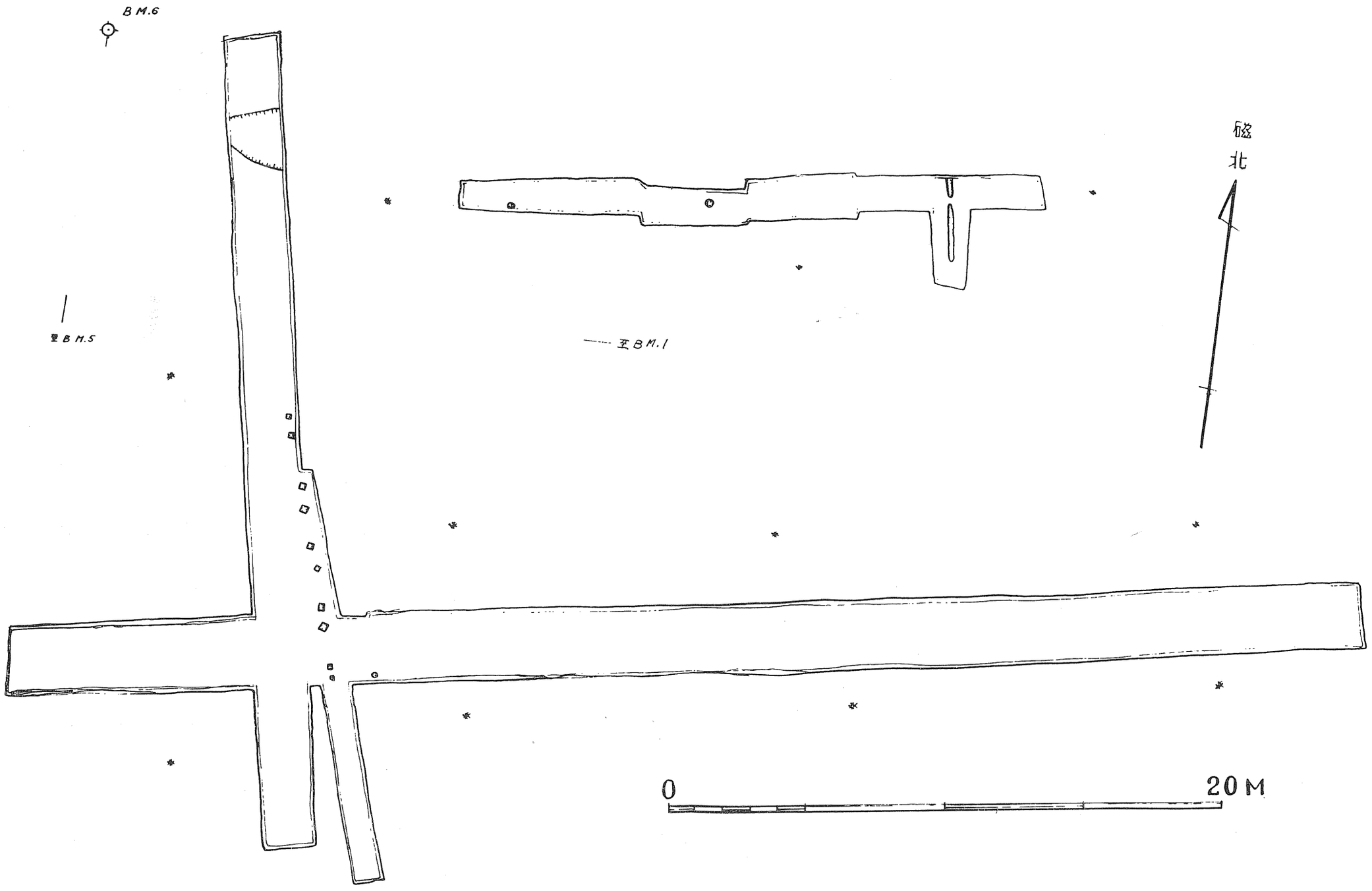
註　図面中央の×印は雲雀野遺跡で、ここを中心とし半径3kmの地域を図示したのが黒円圏である。①は上法茂雄の天下屋布説、黒円圏内の　②は吉田東伍の高尾田説　③は原秀四郎の高寺説　④は深沢多市の土館説の地点を示している。

第2図　調査地域の位置図（1：5,000）



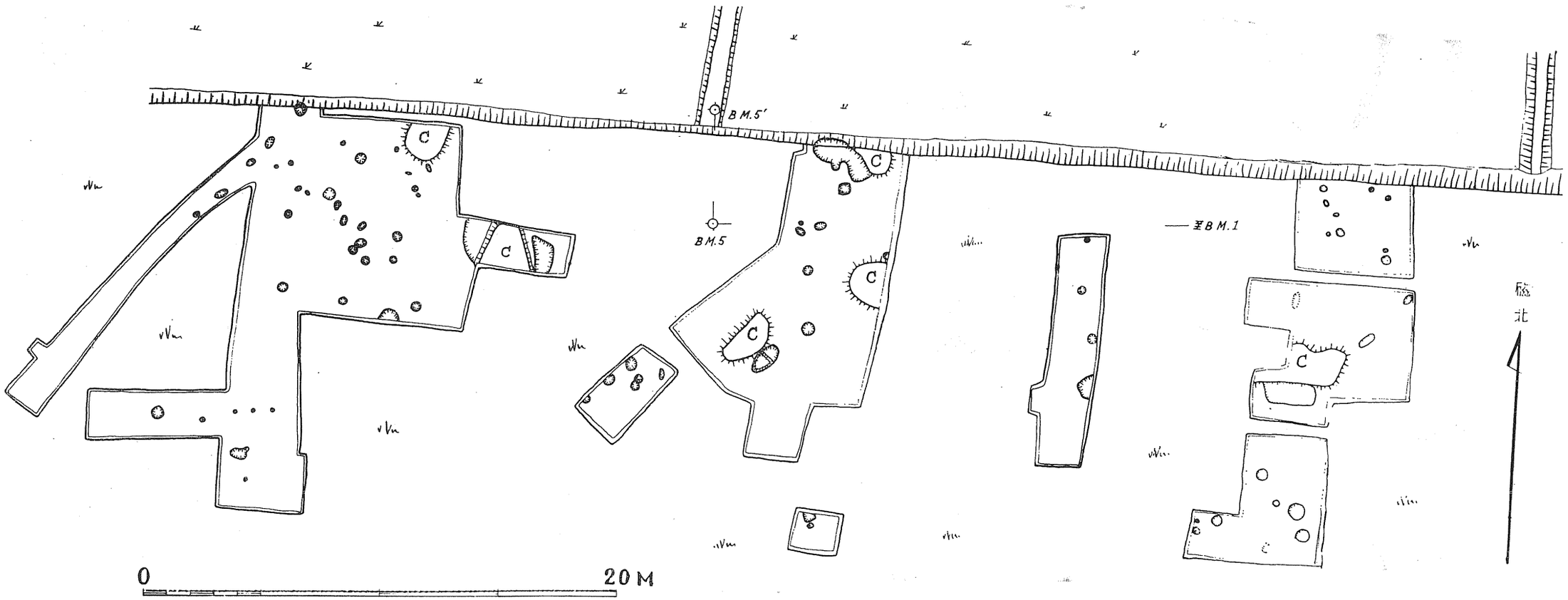
BM．2、BM．3付近は雲雀野A地区。BM．4付近は雲雀野B地区。BM．4の西方は雲雀野C地区。BM．5付近は雲雀野D地区。BM．6付近は羽後高校実習農場地区。BM．7付近は今回の開田地区。岩は岩城地区である。今回調査したのは雲雀野C地区、同D地区、羽後高校実習農場地区、今回の開田地区および岩城地区の一部の5カ所である。それらの詳細については各地区の実測図を参照されたい。

第3図 雲 雀 野 C 地 区 実 測 図（1：100）



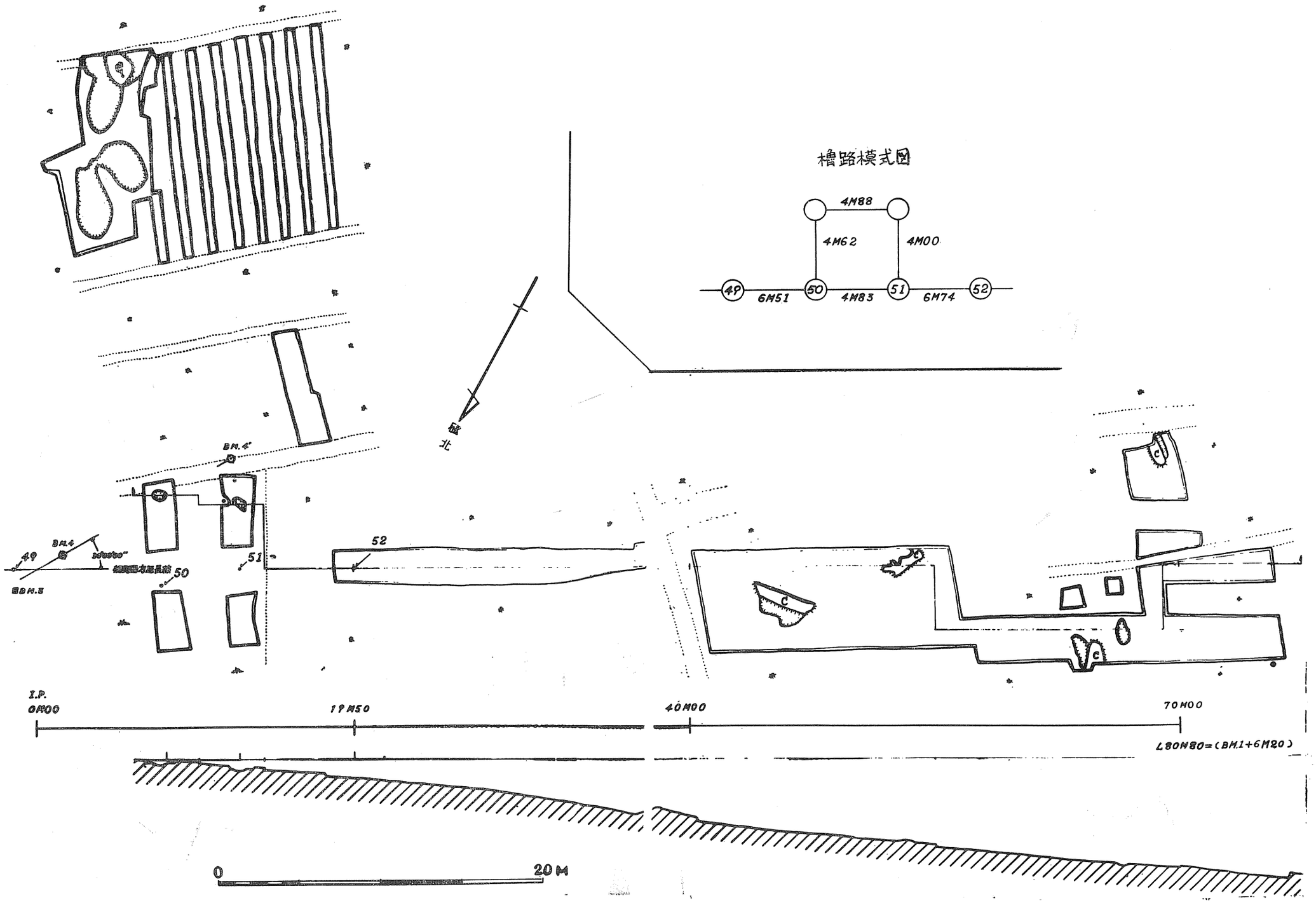
備考　1）距離：BM，3 と BM，4 を結ぶ線と柵列西方延長線の交点を基点として柵列西方延長線上の各々の距離を示しておいた。
　　2）高さ：昭和41年度（第4次）調査時のレベルと同一の高さである。即ち80M80（BM1の高さ＋6M20＝BM、4の高さ）
　　3）標示：①49，50，51，52，の黒点は土壙の中心位置の標示である。
　　② Cの標示は黄色粘土、◎は黒色土。

第6図 雲 雀 野 D 地 区 平 面 実 測 図（1：100）



備考： Cの標示は黄色粘土、⬭は黒色土。

第8図　羽後高校実習農場地区平面実測図（本文をみて第６図の様にスケールを入れて下さい）

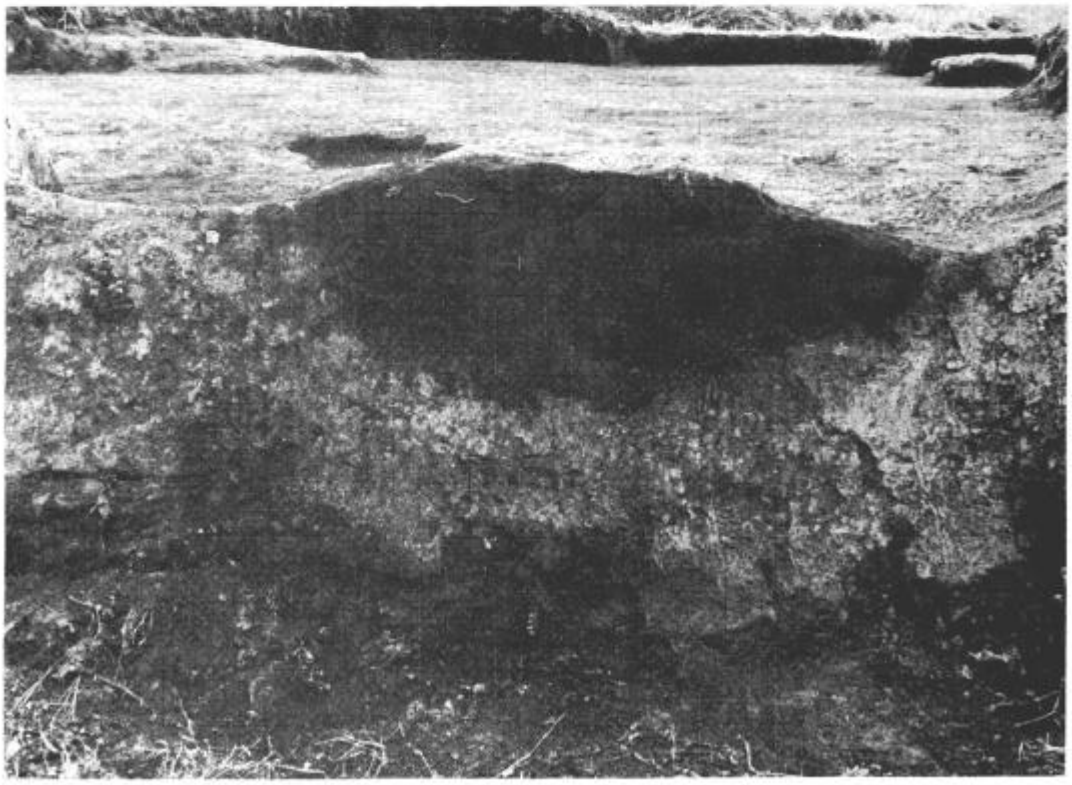


備考：　◎の標示は黒色土 。

第4図　雲雀野C地区櫓跡土坑写真

柵列から外へ5m弱張り出している櫓跡の土坑が2カ所見えている。

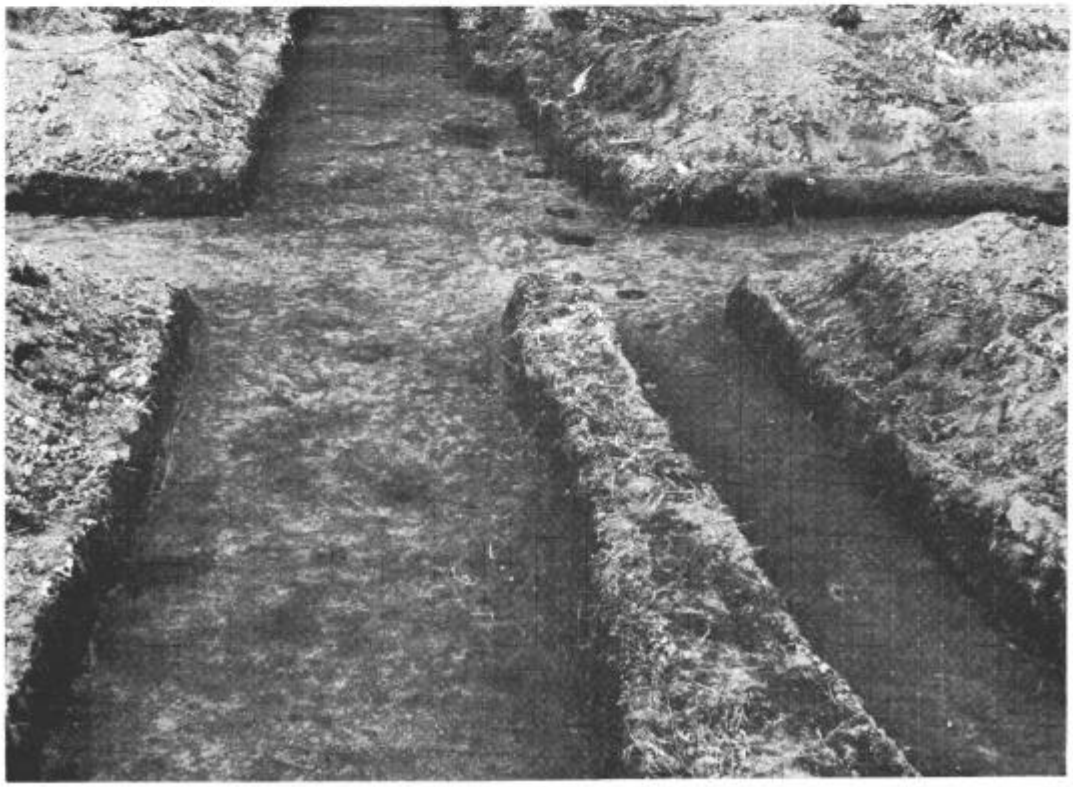
第5図　雲雀野D地区北崖（断面に見えていた土坑写真）



第7図　雲雀野D地区発掘写真

西より東方にのぞむ。土坑（径10～25cmの円形）が散在しているのが見える。

第9図　羽後高校実習農場（地区柱穴写真）



あ　と　が　き

この遺跡の発掘調査を手がけて早くも９年になります。その間今年まで５次にわたる調査がおこなわれております。

まぼろしの城といわれる雄勝城は本書にもあるようにその擬定地が10カ所ほどあります。足田遺跡もその１つであります。今までの調査の結果、住居址、土器、窯跡などが発見され、また今年の調査では樽跡が発見され、着々とその資料が増加しております。

しかしながら、未だ雄勝城であるという決定的なところまではいたっておりません。それは足田遺跡の範囲が広く、かつ地形が複雑であること、またその地形が新しい機械によってどんどん変えられていることなどが原因と考えられます。

古代城柵は自然地形を利用して作ったといわれております。その地形が変化していることは発掘調査を進めるうえに大きな障害となっております。

このような状態で実際に調査を担当された調査員の苦労は大変なものでありました。その労苦に対し心から感謝の意を表したい。

昭和44年３月

秋田県教育庁社会教育課
吉　川　欣　一
児　玉　正　路
富　樫　泰　時